

個的社会と高齡社会

高田一夫
(一橋大学)

高齡化社会と個的社会

- 桜美林では、高齡化についてずっと授業をしてきました。高齡化は深刻な問題ではなく、調整すれば乗り切れるという趣旨でした。
- そして、高齡化の下で、新しい社会が生まれてきているというトピックも話してきました。
- それが「個的社会monadic society」です。これは私のオリジナルな概念です。

100年に一度の大転換

- 現在、日本(だけでなく)には100年に一度の大変化が起きている。
- それは「**個的社会**」の到来です。
- 個的社会は市民社会の進化した形態であり、21世紀の市民社会です。

個的社会とは？

- **個人**が中心となる社会である。

その**反対**は集団主義の社会

例: 会社の集団主義「社員旅行」、「会社の運動会」、(宴会で上司が)「俺の酒が飲めないのか」 = 権威主義

- **自己決定**が重視される。

民族自決は(民族の)集団的権利であるが、自己決定は個人的権利 = 人権である。

1. 会社は個人主義化した

- 日本の会社は「**共同生活体**」(津田真澄)だった。
- 社員旅行、運動会など**全員参加**の、仕事以外の行事がいろいろあった。
- 現在はこのような行事はなくなった。しかし希望者だけが参加する**サークル活動**(スポーツ、音楽、美術、ボランティア活動など)は現在も盛んだ。個人主義のものはなくなっていない。

2. 家族も個人主義

- 家族の一体性が薄れている。

(1) 3世代家族の減少

3世代同居率は(国民生活基礎調査による)、
1986年 44.8%→2019年9.4%と激減した。

(2) 個室と個食

個室(自分だけの部屋)が一般化した。

個食(家族がばらばらに食事する)が珍しくない。

2a. 家族の紐帯が弱まった ホームレスの出現



[https://ja.wikipedia.org/wiki/
ホームレス](https://ja.wikipedia.org/wiki/ホームレス) 2018年8月21
日閲覧

出典: [http://n-seikei.jp/2009/11/post-
1811.html](http://n-seikei.jp/2009/11/post-1811.html) 2018年8月21日閲覧

2b. 家族の紐帯が弱まった(続)

- ホームレスとは、一定の住所を持たない野宿者をいう。かつては乞食とよばれていたが、現代では物乞いではなく、さまざまな手段で自活している。
- ホームレスになる原因は多様であるが、失業がきっかけになることが多い。また、失業しても支えてくれる家族がないことが、大きな要因である。

2c. ホームレスは燃え尽きた人々

- 家族の支援もなく、職業でも失敗し、最終的に路上生活に追い込まれた人々は、精神を病んでいる人が多い。つまり、生活のストレスに押しつぶされ、働く意欲を失ったのだ。
- そこで、NPO(民間で社会的支援を提供する団体)が支援活動をしている。それは**自立**支援である。



る。

『ビッグ・イッシュー』を売る元ホームレスの人

4. 2つの対立する見解

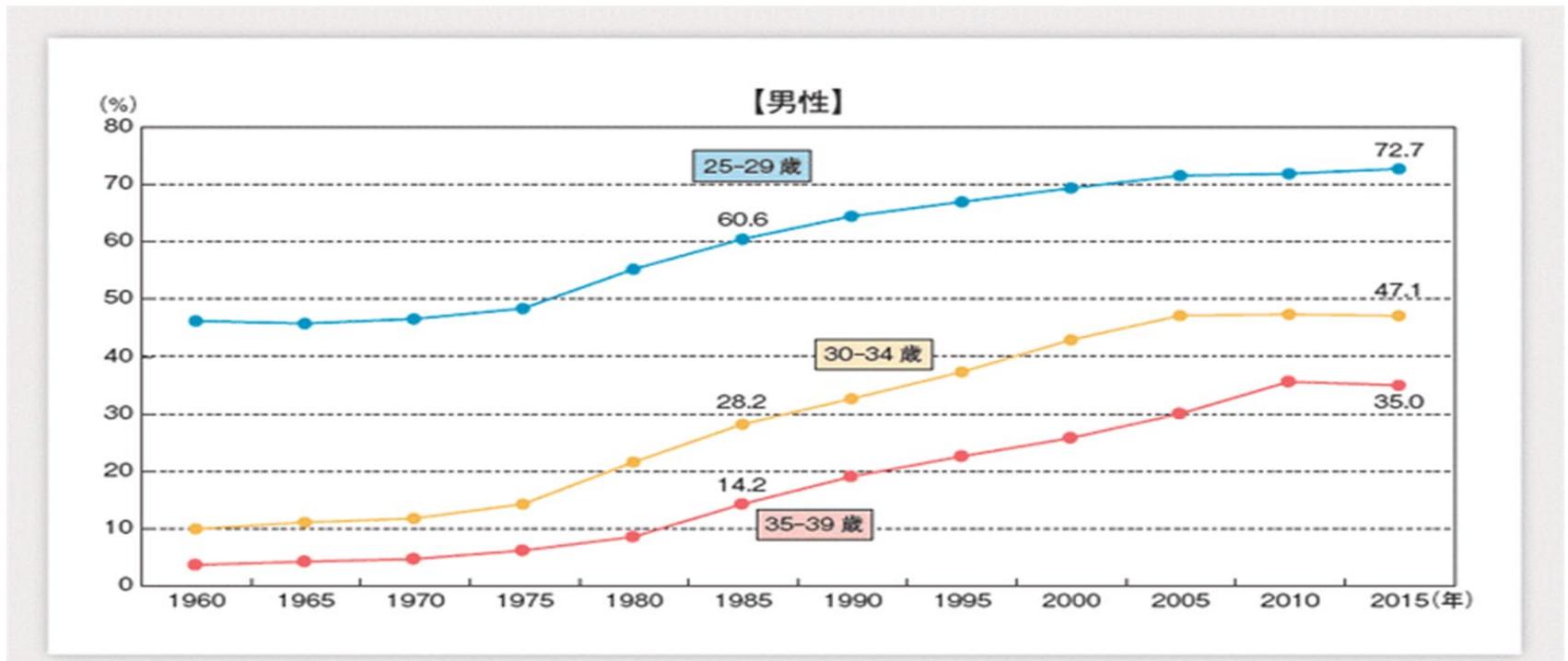
- 1980年代から新しい時代が始まった。
- それは、**新自由主義**という考えを基盤とする社会だ、という見解がかつて、有力だった。
- これは、振り子史観という歴史観である。つまり、19世紀の自由主義が20世紀に福祉国家へ転換し、そして再び21世紀に自由主義に復帰した、というのである。
- 果たしてそうだろうか？ 高田の見解＝**個的社会**の登場

NPOは新自由主義か？

- NPOは**新自由主義**の主張する規制緩和、民営化の理念から生まれた。国家ではない民間の非営利団体（non-profit organization、欧州ではNGOと呼ぶことが多い）が、政府に代わって様々な社会サービスを提供するのは、政府部門（公共部門）の縮小であるからだ。
- しかし、NPOは市民の自主的な活動である点で、**個的社会**の一例と言える。ホームレスを支援するNPOは個的社会の一例である。

2d. 単身社会

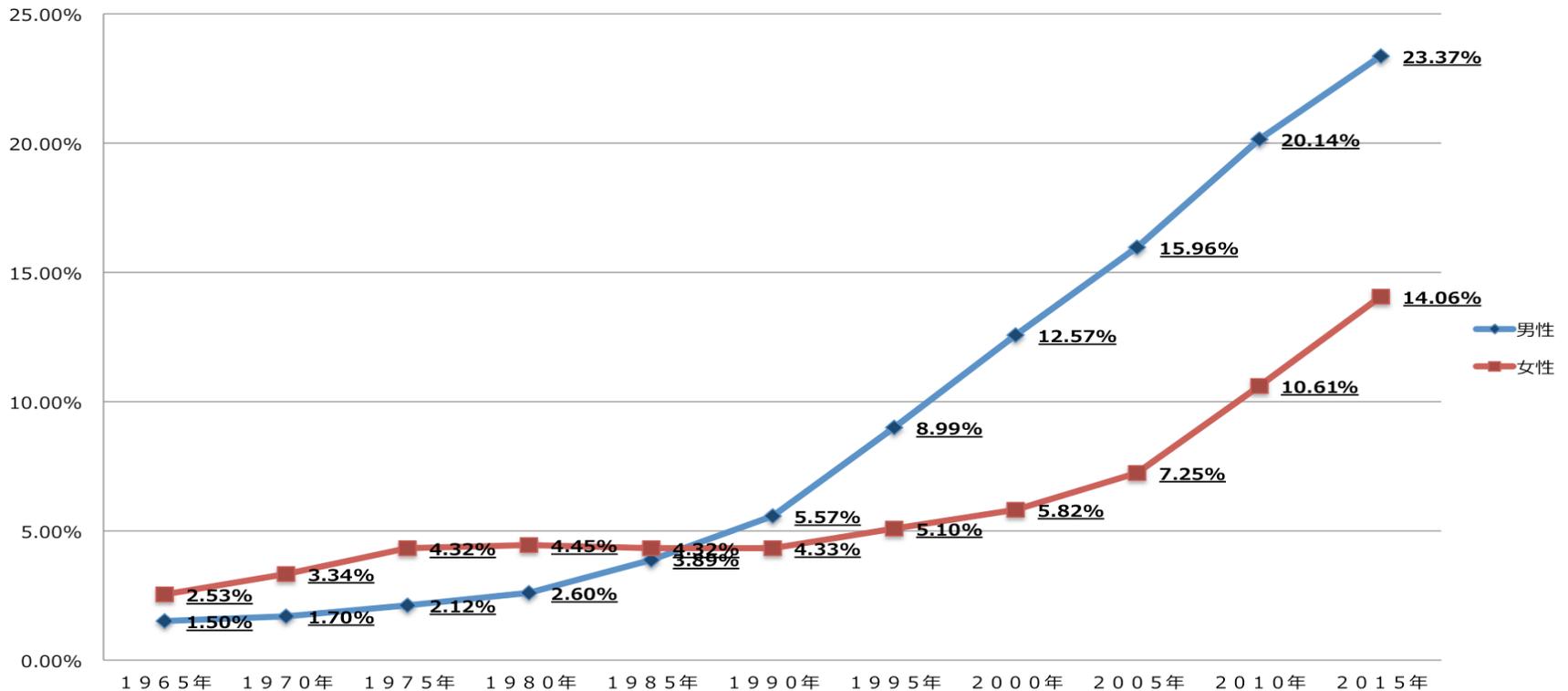
- 単身者(一人で生活する人)が増えている。
それを非婚化現象という。



資料出典:総務省「国勢調査」

2e. 生涯未婚率の増加

生涯未婚率とは45-49歳の未婚率と50-54歳の未婚率の単純平均である。



2f. 非婚化は望んだ結果ではない

結婚しない理由	人数	(3 構成比 つまで複 数回答)
結婚するにはまだ若すぎる	732	26.8
結婚する必要性をまだ感じない	1,060	38.8
今は、仕事（学業）にうちこみたい	874	32.0
今は、趣味や娯楽を楽しみたい	703	25.7
独身の自由さや気楽さを失いたくない	785	28.7
適切な相手にまだめぐり会わない	1,195	43.7
異性とうまくつき合えない	319	11.7
結婚資金が足りない	811	29.7
結婚生活のための住居のめどがた たない	191	7.0
親や周囲が結婚に同意しない（だ らう）	129	4.7
その他	77	2.8
総数	2, 732	100.0

出典：社会保障人口問題研究所「結婚と出産に関する全国調査」
第13回（2005）

2g. 見合いシステムが崩壊した

- かつては見合いという、結婚相手を詳解するシステムがあった。
- 親戚や知人、会社の上司などが結婚相手を紹介した。
- これは若い人たちには相当の圧力であった。
- 自分の気に入った相手と結婚したい、と若い人たちは考えた。その結果、周囲も圧力をかけなくなった。個人主義が浸透したのである。

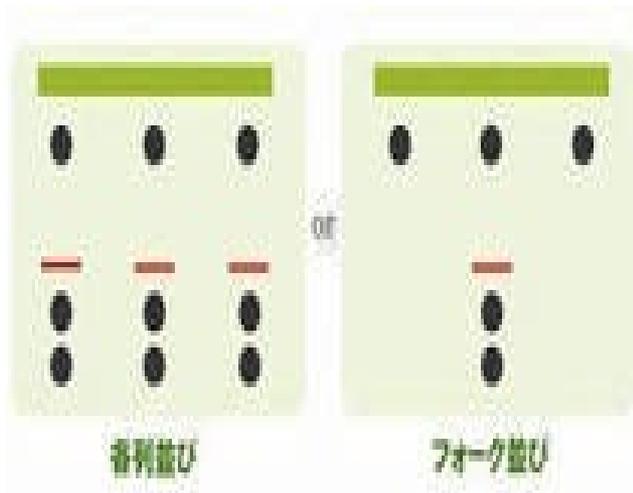
集団が弱くなり、 個人が強くなった

- 集団は個人を保護してくれる。しかし、個人の活動を制限もする。家族と個人の自由の葛藤は、近代文学の定番のテーマであった。
- 会社も個人を縛ってきた。過労死はその悲しい例である。
- 個的社会は個人の縛りが弱くなった社会である。
- しかし、同時に個人の孤立化を引き起こしている。これは現代社会の大きな問題である。

3. 個的社会の新しい絆

- 個的社会は人間の孤立を深める社会なのだろうか。
- 答えは「yes, but」。孤立は深まっているが、連帯も追求されている。言い換えると、新しい共同性が生まれつつある。
- フォーク並びはその代表的な例だ。

3a. フォーク並び



pallium2000.blog14.fc2.com

<http://www.wikiwand.com/ja> 閲覧はい
ずれも2018年8月22日

「各列並び」は自分の都合を優先する競争モデルである。それに対して「フォーク並び」は他者と自分を共通に縛るルールの下で行動するので、「強調モデル」と言えよう。

3b. フォーク並びは突然出現した

- 欧米ではフォーク並びはずっと以前から行われていたが、日本には見られず、競争モデルの各列並びが一般的だった。
- ところが、2000年あたりから突然出現した。報告者は2000年に東京駅で初めて遭遇した。
- あまりに驚き、2006年に4地域（東京、大阪・神戸、福岡、山形）で市民意識調査を実施し、ほぼ等しく行われていることを確認した。

3d. 市民社会の出現

- 日本には**市民社会**はない、と言われていた。しかし、フォーク並びが突然、急速に全国に広まったこと、また何の外的な働きかけもなく出現したことを見ると、日本に市民社会が登場したと見て良いだろう。
- これは日本の**近代化**が経済だけではなく、一般市民の考え方に関しても、実現したことを示すものだ(ウェーバーは市民社会は欧州にしかないと述べている)。

近代化とは何か

- 近代化とは経済が市場経済として成熟すること、また、政治的には民主主義が確立することと考えられている。前者は産業革命 industrial revolution、後者は市民革命 civil revolution が代表例である。
- 日本には明確な市民革命はなかった（第2次大戦の敗戦、占領は市民革命に似た効果を持った）。そして古い社会意識が残存していると言われていた。フォーク並びの登場は、日本社会が完全に近代化したことを証明した。

個的社会は市民社会の 新しい段階である

- 市民社会はギリシア・ローマから始まったとされるが、平等な成員からなる自由な社会という意味である。
- しかし、歴史的にはその成員は、社会の一部の人たちだけだった。
- ウェーバーも言っている通り、欧州では中産階級（ブルジョア）に限られていた。それが20世紀には労働者階級も市民と見なされるようになり、21世紀にはすべての人が市民となりつつある。これが、個的社会である。

個的社会の最重要原理は 自己決定だ

- ドイツの社会学者ベックは「欧州どこでも人々は**自分が主あるじになれる**領域を求めている(*Individualization*, 2002)、と書いた。自分が主になるとは、自己決定するということである。
- 自己決定の保障は社会の様々な面で見られる。ユニヴァーサル・デザインやインフォームド・コンセント、人事管理のMBOも理想的には同じものと言える。

自己決定の尊重は 福祉の領域で進んでいる

- 社会福祉は、自立した生活ができない人々を支援するサービスである。
- サービスを提供する際に、**自己決定を尊重**することが現代の福祉の基本原理である。
- これら福祉の対象者＝老人、障害者などは自己決定が困難な状況にいる。誰かの手助けが必要だからだ。そして、手助けが介護者からの押しつけになりやすいのである。

最後に

- 自己決定の拡大が進むと、どのような社会が生まれるのか。
- マルクスは『ドイツ・イデオロギー』で理想社会では、分業がなくなり、昼間は漁師をして夜は哲学者になることもできる、と書いた。
- これは、**自己決定の拡大**が進んだ社会のイメージである。これは遠い目標だが、現実の社会は微少とはいえ、その大目標に一歩ずつ近づいていると言えよう。